

No. 929

リ ュ ー ジ ュ

— 冬季オリンピック迫る —

北海道旭川市神居古潭で合宿するリュージュ選手団。
石狩川の辺を走る国鉄の廃線を利用したサイクリング・ロードを、自転車にソリをつけて走りまくっています。
冬季オリンピック種目の中で、最も歴史の浅い、リュージュ（氷でかためられたコースを木製ソリを使って滑降する）は、国際大会の戦績も3度しかなく、6位入賞をめざすのが勢一杯。僅かに女子の大高優子に入賞が期待されるだけです。しかし選手団は、秋の短い陽射しがかげるともかまわず、ほの暗い道をトレーニングに励んでいます。

復 活

— 全盲画家の半生 —

……「私は、けいれんをおこしかけている自分の体を最後の力でささえると、いま描きあげた一号の静物画の裏面に、1961
6.26. T.Suzuki と鉛筆でサインを入れた。サインを入れ終ると、鉛筆が右手から落ちた。すべての力を失って行く自分をしばらく両手で顔を覆ってささえていたが、「俺は復活した。俺は画家として復活した。俺は絵を描けたんだ」……
20年ぶりにやっと一枚の絵を描きあげた時の歓喜を自からの著書『指が目になった』の中で、鈴木敏之さん（栃木県鹿沼市、51歳）はこう書いている。昭和16年画家になろうと決心していた鈴木さんを襲った余りにも過酷な運命は鈴木さんから「光」の世界をうばった。失明後の苦しみは想像を越えるものがあった。自殺を企てたこともあった。実生活の不自由さには長い年月のうちに慣れても来た。しかし押さえても押さえても泉のように沸きあがって来る絶対美に対する精神的要求はどうしようもなかった。鈴木さんの言葉を借れば「どうしても絵が描きたいという心の底に食いついている執念は激しく心の奥でのたうた。色と絵に対する熱病のような渴きは日夜、心と肉体をさいなんだ」。
全盲、それは、絵画の世界では、絶対に不可能とされていた。だが「執念」はついに不可能を可能にした。彼は画家として復活したのだ。あらゆる困難にうちかって自分自身であみだした独得の手法で今日も鈴木さんは画を描き続ける。